神無月

〔かんなづき〕令和4年10月

古くから日本中の神々が出雲大社（島根県）に集まると信じられていたので、出雲以外の神社には神様がいなくなってしまうという意味があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

たなつ物、ももの木草も天照らす日の大神のめぐみ得てこそ

～ 本居宣長・玉鉾百首 ～

今月のことば

たなつ物、ももの木草も天照らす
日の大神のめぐみ得てこそ
～ 本居宣長・玉鉾百首 ～

「たなつ者」は田根つ物で、田に根を下ろした作物で五穀のことをいう。「百の木草」は色々の草や木大地に生える千草のことである。そのいづれも、自然の太陽の恵みを受けて、初めて生成化育を全うすることができる。それが、日の神を天照大神とする信仰から、自然の太陽の恩恵を日の大神（天照大神）に譬えたものに外ならない。天地の物の育成発展はもとより、私たちが健康でいられることも、太陽の光の下に於いて、初めてその成果が得られる。大地に足を踏みしめ、太陽の恵みを十分に浴びたものが健康であるように、自然と人生との関係が、この歌の裏に秘められている。

全国に鎮座する天照大神を祀る神明社の信仰のうちには、こうした観点から奉祀されたものも少なくない。信仰はこころだけの問題でなく、身体の健康からも追及されるとき、人減も自然の生命と共に生きるものとして、こうした信仰に生きる道も見出していきたい。

（続神道百言　一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

千歳　十月十五日　七五三祝

七五三の祝は、「七歳までは神の子」といわれた時代に、三歳の男女児が髪を伸ばしはじめる「髪置」、五歳の男児がはじめて袴を着ける「袴着」、七歳の女児が大人の帯を着けはじめる「帯解」の儀式に由来します。子供の心身の成長の節目にあたる縁起の良い奇数の歳に、氏神様にお参りし、無事成長したことへの感謝とこれからのご加護をお願いします。

十一月十五日は「鬼宿日」、つまり鬼が出歩かず自分の家にいるため一年で最良の日とされていたことや、霜月参りで氏神様を山に送り出す日に当たっていたことから、この日が七五三のお祝いの日に決められたと言われていますが、北海道では気候の関係から、一ヶ月早い、十月十五日に行う習慣があります。

神嘗　十月十七日　伊勢神宮 神嘗祭

天皇陛下が新穀を伊勢の神宮に献る一年中で最も重要な祭りです。外宮では十月十五日の夕と十六日の朝に由貴大御饌を供進し、十七日は勅使が参向します。内宮では、十月十六日の夕と十七日の朝に由貴大御饌を供進し、十七日は勅使が参向します。

神宮では六月・十二月の月次祭と神嘗祭の三祭を三節祭と呼び、最も大切な祭りです。

神在月（かみありづき）とは？

十月は神無月で、出雲は神々が集まられるので神在（かみあり）月だという信仰が今もあります。またカンナヅキは神を祭る『神の月』だとか、神酒醸造のための「醸成月（かみなしづき）」だという説等は、いづれも篤い信仰を物語ります。そして刈上祝いに直結する秋祭りこそは、年間最大の賑わいを呈します。

早春以来、豊作を祈り続けた農民の心に満足がもたらされると歓喜の表現をするのは当然であって、この方法を日本は古代から「神在月」の祭りをあらわして来ました。人々の心は祭りに結集し、祭りは日本人の心を培うという相関関係が繰り返されてきました。そのため祭りの繰返しが途切れることは、最も重大なことが断絶されることに繋がる恐れがあります。

天壌無窮（てんじょうむきゅう）

天地と共に窮（きわ）まりのないこと。永遠に続く事。

参考文献
『日本人数のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）

令和４年
２０２２年

１０月

日	月	火	水	木	金	土
						1 友引 る
2 先負 ね	3 仏滅 うし	4 大安 三りんぼう とら	5 赤口 一粒万倍日 う	6 先勝 たつ	7 友引 み	8 先負 寒露 十三夜 一粒万倍日 三りんぼう うま
9 仏滅 ひつじ	10 大安 ● スポーツの日 さる	11 赤口 一粒万倍日 とり	12 先勝 いぬ	13 友引 る	14 先負 七五三（北海道） ね	15 仏滅 うし
16 大安 とら	17 赤口 伊勢神宮神嘗祭 う	18 先勝 たつ	19 友引 み	20 先負 土用 一粒万倍日 三りんぼう うま	21 仏滅 ひつじ	22 大安 さる
23 赤口 霜降 一粒万倍日 とり	24 先勝 いぬ	25 仏滅 る	26 大安 ね	27 赤口 うし	28 先勝 とら	29 友引 う
30 先負 たつ	31 仏滅 み					

二十四節気

【寒露　かんろ】…八日

旧暦九月戌の月の正節で、このころになると、五穀の収穫もたけなわで、農家ではことのほか繁忙を極めますが、山野には晩秋の色彩が色濃く、朝晩は肌がそぞろ寒気を感じはじめるようになります。寒露とは、晩秋から初冬にかけて野草に宿る露のことをさします。

【霜降　そうこう】…二十三日

旧暦九月戌の月の中気で、秋も深まり、早朝など、ところによっては霜を見るようになり、冬の到来が感じられます。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《10月》

寒露
- 初候・鴻雁来（こうがんきたる）
  雁が北から渡ってくるころ
- 次候・菊花開（きくのはなひらく）
  菊の花が咲き始めるころ
- 末候・蟋蟀在戸（きりぎりすとにあり）
  キリギリスが戸口で鳴くころ

霜降
- 初候・霜始降（しもはじめてふる）
  北国や山里では霜が降り始めるころ
- 次候・霎時施（こさめときどきふる）
  ぱらぱらと小雨が降りだすころ
- 末候・楓蔦黄（もみじつたきばむ）
  もみじやつたが色づいてくるころ

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

安産祈願　１０月の戌（いぬ）の日

１２日（水）
２４日（月）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう

「十三夜」…十月八日
「十五夜」と同じ場所から感謝の月見

旧暦の九月十三日、今年は十月八日の月見を「十三夜」といい、十五夜を中秋の名月と呼ぶのに対し、十三夜は秋の収穫を祝うという意味もあり、豆や栗などの作物を供えましたので、「後の月」「豆名月」「栗名月」ともいいます。

旧暦の毎月十三日の夜を「十三夜」といっていましたが、旧暦九月の十三夜は、十五夜についで美しい月とされ、宮中では、平安時代から宴を催すなど月を鑑賞する風習がありました。十五夜は中国から伝わったものですが、十三夜は日本古来の風習で、秋の収穫祭のひとつではないかといわれています。

一般に十五夜に月見をしたら、必ず同じ場所で十三夜にも月見をするものともされていました。これは十五夜だけ鑑賞するのは「片月見」といって嫌う風習があったからです。